2019/7/21　中原キリスト教会

**「イサクのゲラル滞在」**

創世記　26:6-14

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　本日お読みいただいた聖書箇所は創世記26:6-14でイサクがゲラルという町に滞在していた時の出来事ですが、見ていきたいのはイサクの生涯全体に関わることで26章全体に関連します。従って、26章全体を概観することから始めたい、と思います。最初に1節で「さて、アブラハムの時代にあった先のききんとは別に、この国にまたききんがあった。それでイサクはゲラルのペリシテ人の王アビメレクのところへ行った」とあります。アブラハムの時代にあった飢饉のことは12:10以下に書かれています。アブラハムはエジプトに逃れましたが、イサクはゲラルのペリシテ人の王アビメレクを頼って行きました。ペリシテというのは死海の西、地中海に面した地域でのちにダビデと死闘を繰り返す人々の地です。今、この地域はパレスチナと言いますがペリシテはその語源になった言葉です。ゲラルというのはペリシテの南端の町です。今のガザの少々南です。アブラハム、イサク、ヤコブの時代を族長時代と言いますが、古代の時代区分では中期青銅器時代ということになります。この時代にはゲラルは繁栄した町であったことが発掘で明らかになっています。そしてこの町は後にはユダ王国の一部になり、ユダヤ人が多数、植民します。今はイスラエル国家の一部です。ヨセフはそこの王アビメレクのところに身を寄せたと書かれています。

　また主なる神はイサクにエジプトには行くな、と言われています。おそらく、当時はエジプトは異民族ヒクソスの支配にありかつての豊かなエジプトとは程遠い状態であったからではないか、と想像されます。主はそこでイサクにアブラハムへの約束を果たす、と言われました。即ち子孫繁栄です。ここで事件が起こります。イサクが妻リべカを妹と偽って自分が殺されることを回避しようとした、というのです。リべカが美しいのでイサクを殺して、彼女を奪おうという人間が出てきはしないかというおそれからだというのです。王アビメレクはイサクがリべカを愛撫しているのを見て、妻であることが解りました。10節で「アビメレクは言った。「何ということをしてくれたのだ。もう少しで、民のひとりがあなたの妻と寝て、あなたはわれわれに罪を負わせるところだった」」と言われています。しかし、アビメレクはイサクを罰するのではなく、「この人と、この人の妻に触れる者は、必ず殺される」というお触れを出し、イサク、リべカを守ります。そして、イサクはその地で大変栄えた、とあります。イサクが、このような虚偽の事を言っても罰はなく、逆に繁栄した、とされています。

　この結果ペリシテ人はねたみ、イサクに悪さをします。アブラハムの時代からの井戸を土で埋めてしまったのです。そして王アビメレクから「出て行ってくれ」と言われます。手の良い追放です。イサクはゲラルの谷間に天幕を張り住みました。おそらく行くところがなかったのでしょう。そして昔の井戸を掘り返して水を得ようとします。そのうちに、湧水の出る井戸を見つけました。地下水まで掘る手間が省けますし、湧水ですので新鮮な水だったのでしょう。ゲラルの羊飼いと争いになりました。しょうがないのでまた次の井戸を掘ります。またゲラルの羊飼いが争いとなり、とられてしまいます。それからはなれた所で井戸を掘りあて、これでやっと自分たちの井戸を確保することができました。しばらく、ここに滞在していた、と思われます。

　しかし、今度はベエル・シェバに行くことになります。ゲラルから死海に向かって数キロ、行ったところです。ベエル・シェバは「7つの井戸」という意味と考えられ、多くの井戸があったところです。アブラハムが別のアビメレクと互いに誓った場所ということで「誓いの井戸」という理解もあります。アブラハムがイサク奉献の事のあと住んだ地です。イサクはそこで主の祝福を得て栄えていたようです。そこにゲラルの王アビメレクが来ます。「主がイサクとともにおられる」ことが解ったのでお互いのために契約を結びたい、というのです。互いに害を加えない、という安全保障契約です。合意し、宴会を催し、飲み食いしました。これは契約成立のしるしです。

26章の最後にはイサクの子、ヤコブの兄、エサウがヘテ人の妻を2人めとり、両親であるイサク、リべカの悩みの種となったと、記されています。ヘテ人というのはトルコ南部からシリアにかけて住んでいたヒッタイト人のことではないか、と言われています。鉄の兵器を持ち強力な軍事力をもっていたので有名です。おそらく異教崇拝のためイスラエルの血筋であるヤコブとの仲たがいのことを指しているのだと思われます。

以上が26章の全体ですが、大きく分けて2つの話が入っています。一つはアビメレクに対し、妻リベカを妹と偽ったはなし、二つ目はペリシテ人との井戸を巡る争いとアビメレクとの契約の話です。最初の妻を妹と偽った話は12章のエジプトにおけるアブラハムの話にも出てきます。12:10以下をお読みします。「さて、この地にはききんがあったので、アブラムはエジプトのほうにしばらく滞在するために、下って行った。この地のききんは激しかったからである。/彼はエジプトに近づき、そこに入ろうとするとき、妻のサライに言った。「聞いておくれ。あなたが見目麗しい女だということを私は知っている。/エジプト人は、あなたを見るようになると、この女は彼の妻だと言って、私を殺すが、あなたは生かしておくだろう。/どうか、私の妹だと言ってくれ。そうすれば、あなたのおかげで私にも良くしてくれ、あなたのおかげで私は生きのびるだろう。」/アブラムがエジプトに入って行くと、エジプト人は、その女が非常に美しいのを見た。/パロの高官たちが彼女を見て、パロに彼女を推賞したので、彼女はパロの宮廷に召し入れられた。/パロは彼女のために、アブラムによくしてやり、それでアブラムは羊の群れ、牛の群れ、ろば、それに男女の奴隷、雌ろば、らくだを所有するようになった。/しかし、主はアブラムの妻サライのことで、パロと、その家をひどい災害で痛めつけた。/そこでパロはアブラムを呼び寄せて言った。「あなたは私にいったい何ということをしたのか。なぜ彼女があなたの妻であることを、告げなかったのか。/なぜ彼女があなたの妹だと言ったのか。だから、私は彼女を私の妻として召し入れていた。しかし、さあ今、あなたの妻を連れて行きなさい。」/パロはアブラムについて部下に命じた。彼らは彼を、彼の妻と、彼のすべての所有物とともに送り出した」とあります。ここでもエジプトの王パロに「あなたは私にいったい何ということをしたのか」と詰問されていますが、罰せられたとはしるされていません。逆にパロとその家がひどい災害で痛めつけられた、といわれています。そして最後にアブラム一家は「すべての所有物とともに送り出した」と書かれています。アブラムはそれまでに、エジプトでかなりの財産を持つことになっていたとされていますから、それらのものも没収されず、送り出されたのです。

また20章にはアブラハムがゲラル王アビメレクに、同様に妻を妹と偽る話が出てきます。少々長くなりますが1節からお読みします。「アブラハムは、そこからネゲブの地方へ移り、カデシュとシュルの間に住みついた。ゲラルに滞在中、/アブラハムは、自分の妻サラのことを、「これは私の妹です」と言ったので、ゲラルの王アビメレクは、使いをやって、サラを召し入れた。/ところが、神は、夜、夢の中で、アビメレクのところに来られ、そして仰せられた。「あなたが召し入れた女のために、あなたは死ななければならない。あの女は夫のある身である。」/アビメレクはまだ、彼女に近づいていなかったので、こう言った。「主よ。あなたは正しい国民をも殺されるのですか。/彼は私に、『これは私の妹だ』と言ったではありませんか。そして、彼女自身も『これは私の兄だ』と言ったのです。私は正しい心と汚れない手で、このことをしたのです。」/神は夢の中で、彼に仰せられた。「そうだ。あなたが正しい心でこの事をしたのを、わたし自身よく知っていた。それでわたしも、あなたがわたしに罪を犯さないようにしたのだ。それゆえ、わたしは、あなたが彼女に触れることを許さなかったのだ。/今、あの人の妻を返していのちを得なさい。あの人は預言者であって、あなたのために祈ってくれよう。しかし、あなたが返さなければ、あなたも、あなたに属するすべての者も、必ず死ぬことをわきまえなさい。」/翌朝早く、アビメレクは彼のしもべを全部呼び寄せ、これらのことをみな語り聞かせたので、人々は非常に恐れた。/それから、アビメレクはアブラハムを呼び寄せて言った。「あなたは何ということを、してくれたのか。あなたが私と私の王国とに、こんな大きな罪をもたらすとは、いったい私がどんな罪をあなたに犯したのか。あなたはしてはならないことを、私にしたのだ。」/また、アビメレクはアブラハムに言った。「あなたはどういうつもりで、こんなことをしたのか。」/アブラハムは答えた。「この地方には、神を恐れることが全くないので、人々が私の妻のゆえに、私を殺すと思ったからです。/また、ほんとうに、あれは私の妹です。あの女は私の父の娘ですが、私の母の娘ではありません。それが私の妻になったのです。/神が私を父の家からさすらいの旅に出されたとき、私は彼女に、『こうして、あなたの愛を私のために尽くしておくれ。私たちが行くどこででも、私のことを、この人は私の兄です、と言っておくれ』と頼んだのです。」/そこで、アビメレクは、羊の群れと牛の群れと男女の奴隷たちを取って来て、アブラハムに与え、またアブラハムの妻サラを彼に返した。/そして、アビメレクは言った。「見よ。私の領地があなたの前に広がっている。あなたの良いと思う所に住みなさい。」/彼はまたサラに言った。「ここに、銀千枚をあなたの兄に与える。きっと、これはあなたといっしょにいるすべての人の前で、あなたを守るものとなろう。これですべて、正しいとされよう。」/そこで、アブラハムは神に祈った。神はアビメレクとその妻、および、はしためたちをいやされたので、彼らはまた子を産むようになった。/主が、アブラハムの妻、サラのゆえに、アビメレクの家のすべての胎を堅く閉じておられたからである。」とあります。本日の聖書箇所はイサクの話ですので、同じアビメレクでもアブラハムの方は第一アビメレク、イサクの方は第二アビメレクという事にします。同一人物だと言う説もありますが時代的に大分差がありますので、親子と考えるのが素直な理解です。アビメレクというのは「我が父、王」の意味です。アビというのは「私の父」と言う意味であり、「メレク」というのが王の意味です。アビメレクという表現は称号と考えても良いと思います。アブラハムもアビメレクから「あなたは何と言うことを、してくれたのか」と抗議されますが、やはり、罰はなく、逆に、アビメレクは羊の群れや奴隷をイサクに与えています。また妻サラには兄には銀千枚を与えると言っています。更に、このことのために、アビメレク一族には子供ができないようにされていたようであり、アビメレクが贈り物をし、アブラハムにとりなしの祈りをしてもらうと子供が生まれるようになった、というのです。アビメレク側が懲らしめられています。また第一アビメレクとの話ではアブラハムが実は妻は母の違う妹なのだという言い訳をしています。

当時、異母姉妹を妻とする慣習があったのかについては確かめられていません。エジプトやギリシャでは認められていたようです。ユダヤの律法は近親婚として禁止です。アブラハムは律法の確立される前ですから、異教的習慣が影響していたのかもしれません。ちなみに古代日本ではかなりあったようです。創世記自身は律法が確立してから書かれたものですのでこのような結婚はよくない、との前提で書かれています。いずれにせよ、ペリシテの人々にとっては許されないことであったことは確実なようです。ここで注意したいのはアブラハムやイサクが妻を妹と偽ったにも拘わらず、嘘を言った本人は罰せられず、エジプトのパロやペリシテのアビメレク王が懲らしめを受けているのです。実はこれらの箇所に出てくる、「あなたは何と言うことを、してくれたのか」という表現は、取り返しのつかない、大きな罪を犯した、という時に使われる表現なのです。

創世記3章にアダムとエバの話がありますが、知恵の実を食べた二人に、3:13で「そこで、神である主は女に仰せられた。「あなたは、いったいなんということをしたのか。」女は答えた。「蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べたのです。」と記されています。人類が罪に落ちるところでの神様の言葉です。また、4章でカインとアベルの話がありますが、兄弟殺しをしたカインに対し神様は4:10で「そこで、仰せられた。「あなたは、いったいなんということをしたのか。聞け。あなたの弟の血が、その土地からわたしに叫んでいる」」と言われています。人類最初の殺人に対する神様の言葉です。更に、第一サムエル記13章では、イスラエルの初代の王サウルが預言者サムエルのいう事を聞かず、ペリシテ人を生き残らせことを、サムエルが責める場面があります。そこでサムエルは「サムエルは言った。「あなたは、なんということをしたのか。」サウルは答えた。「民が私から離れ去って行こうとし、また、あなたも定められた日にお見えにならず、ペリシテ人がミクマスに集まったのを見たからです」と記されており、神の言葉に反したサウルをサムエルが責める言葉として使われています。すべて決定的罪の場面で使われています。妻を妹と偽ることもこれらと同じく極めて重大な罪であったのです。

それにもかかわらず、アブラハムやイサクが神の罰を受けず、むしろ祝福されているのはどういうことでしょう。神の選びの摂理は重大な罪を犯した人々に対しても、これを越えた恵みとして適用される、と理解せざるをえません。この摂理は神様の側からの一方的な事柄です。神様は、その選びの民を形成する最初の段階で、罪を犯しやすい人間を選びの民の候補とし、忍耐をもって、一方的な恵みをもって導こうとされているのだと思われます。アブラハム、イサクが神の民として選ばれたのは彼らの功績によるものではありません。むしろ取り返しがつかないような誤りを犯しているのに拘わらず主なる神は恵みの約束を実行される、ということです。どうして、彼らが選ばれたのかはわかりません。主なる神の意志である、としか言いようがありません。あえて推測すると、罪を犯す弱き者をあえて選んでいるのではないか、とさえ思われます。その弱き者は神の戒めを守る力もなく、神の期待に反すると言う意味で罪を犯し続け、最後は主なる神に頼るしか方法がない人間です。エジプトのパロやペリシテの王アビメレクのように財力も持ち、大きな力を持った人々とは比較にもなりません。その後、イスラエル民族が形成されていくのですが、北のアッシリヤと南のエジプトという大国に翻弄される民族です。一時的に近隣国を支配し、かなりの王国を形成するのですが、アッシリヤ、バビロニア、エジプト、アレキサンダー帝国とは比較にもなりません。主なる神は弱き者、罪多き者においてその力を示される、という方のようです。このことは新約聖書においても一貫しており、主イエスは取税人、やもめ、浮浪者、病人、のような罪人と見做されていた人々、この世では全く無力な人々にこそ主なる神の力が働くことを示されました。イエス様御自身、全く無力なものとなり、十字架にかかられました。そしてその全く無力な者となられ、我々の罪を負い、罪ある者とされた方の所にこそ主なる神の奇跡が現れたのです。復活がそれです。また、救いの道に導かれた我々はどのような人間でしょう。アブラハム、イサクと比較してましだといえますでしょうか。全然です。今まで、「あなたは、なんということをしたのか。」と言われたことが何度あるでしょうか。小さい時からのことを考えると、隠れたくなります。イスラエルの神様は一点のしみも許さないかたですから、我々が「このくらい大目に見てよ」の類の言い訳は通用しません。しかし、私たちは自分でそれを償いもせず、神の選びの摂理によって主イエスを信じ、救いの道を得ることが許された者です。

次に井戸さがしの物語りをみてみます。創世記21章にアブラハムと井戸の話がやはり出ています。21:22以下をお読みします。「そのころ、アビメレクとその将軍ピコルとがアブラハムに告げて言った。「あなたが何をしても、神はあなたとともにおられる。/それで今、ここで神によって私に誓ってください。私も、私の親類縁者たちをも裏切らないと。そして私があなたに尽くした真実にふさわしく、あなたは私にも、またあなたが滞在しているこの土地にも真実を尽くしてください。」/するとアブラハムは、「私は誓います」と言った。/また、アブラハムは、アビメレクのしもべどもが奪い取った井戸のことでアビメレクに抗議した。/アビメレクは答えた。「だれがそのようなことをしたのか知りませんでした。それにあなたもまた、私に告げなかったし、私もまたきょうまで聞いたことがなかったのです。」/そこでアブラハムは羊と牛を取って、アビメレクに与え、ふたりは契約を結んだ。/アブラハムは羊の群れから、七頭の雌の子羊をより分けた。/するとアビメレクは、「今あなたがより分けたこの七頭の雌の子羊は、いったいどういうわけですか」とアブラハムに尋ねた。/アブラハムは、「私がこの井戸を掘ったという証拠となるために、七頭の雌の子羊を私の手から受け取ってください」と答えた。/それゆえ、その場所はベエル・シェバと呼ばれた。その所で彼らふたりが誓ったからである。/彼らがベエル・シェバで契約を結んでから、アビメレクとその将軍ピコルとは立って、ペリシテ人の地に帰った。/アブラハムはベエル・シェバに一本の柳の木を植え、その所で永遠の神、主の御名によって祈った。/アブラハムは長い間ペリシテ人の地に滞在した。」とあります。此処で出てくるアビメレクは第一アビメレクです。

　21:22で第一アビメレクはアブラハムに「あなたが何をしても、神はあなたとともにおられる」と言っています。ちょっと変な表現ですが、「あなたが何をするときも、主なる神はあなたとともにおられる」という事だと思います。アブラハムには常に主なる神が共にいらっしゃる、ということをアビメレクは理解した、ということです。そして、イサクの物語りの方では26:28でアビメレクとその家来は「私たちは、主があなたとともにおられることを、はっきり見たのです」と言っています。「主、ともにいまして」です。アブラハムやイサクが何もないところから経済的にも裕福となり、幸福なところを見て、アビメレクはアブラハムやイサクは主なる神の祝福の中にある、ことを知ることになります。そしてアビメレクはアブラハム・イサクと契約を結ぶことになります。相互不可侵条約です。そして平和が保証されます。21章のアブラハムの時にも僕同士が井戸のことで争いましたが、ここで二人はこのような争いを止めよう、と言って契約を結んだ、とあります。そしてアブラハムは7頭の雌の子羊をアビメレクに差出、自分たちがこの井戸を掘った証です、といってアビメレクに渡しました。これは平和の契約のしるし、です。二人が誓ったのでこの地をベエル・シェバというようになったとされています。「誓いの井戸」という意味です。26章のイサクの時は「７つの井戸」でした。両方の意味を含んでいるのだと思います。重要なのは僕の争いをアブラハム、アビメレクが無意味だから争いはやめよう、ということで契約を結び平和的関係にもって行ったことです。親分が争っていてはだめで、親分同氏は平和を齎すのが役目です。

　この点は26章のイサクの場合はもっと具体的です。14節でペリシテ人のねたみを買い、井戸を埋められてしまい、ますが、イサク達はゲラルの谷間でまた井戸を見つけます。そこでも二度ゲラルの人々に井戸を奪われ、やっと、三度目の正直で、レホボテというところの井戸がやっと自分たちだけで使えるようになります。アブラハムの時はベエル・シェバの話でしたが、イサクの時はゲラルの谷間でのことです。レホボテというのは「広々とした所」の意味です。イサクの場合はそのあとベエル・シェバに移り、そこにアビメレクとその部下がやって来て、仲直りをし、やはり契約を結び、そのしるしとして宴会を催しました。更にそこで井戸水をみつけ、その地をベエル・シェバ、「7つの井戸」となずけた、としています。イサクはペリシテの人々に散々なめにあわされても、これにたてつくようなことはせず、次々と代わりの井戸を見つけ、最後はアビメレクのほうから、「参りました」というようになり、平和条約の締結に到ったのでした。

　どちらのケースも井戸を巡る争いが武力の行使に到ったような様子はありません。大体は、アブラハム、イサクの方が引いています。しかし、神の祝福があるため、また井戸を見つけます。これをみて第一、第二のアビメレクは主なる神が彼らの味方でいることを理解し、契約締結の申し出をするのです。両者が「プライドがゆるさない」とか「民族や国の威信にかけて」と言っていると武力衝突になり、勝った、負けた、の世界になります。負けた方には恨みが残り、リベンジが起きます。のちに、ペリシテ人とイスラエルは犬猿のなかになりますが、この族長時代はそうではありません。異邦人との間も闘わず、なんとか折り合いをつけて平和の裡（うち）にこの世の営みを続けて行くようにするのです。指導者の責任はそのような平和を作ることに責任があるのです。平和を作り出すために、アブラハム、イサクは忍従の日々を強いられたこともあるでしょう。神様の恵みを信じ、戦いを避ける努力をしていたのです。創世記には武力による戦いはほとんどありません。その後、ヨシュア記、士師記、サムエル記、列王記の世界では戦いが止むことはありません。そして預言者ミカ、イザヤに到って「武力で平和は造れない。軍事力を放棄するしかない」というメッセージが告げられます。そして遂に主なる神は自らの子を罪の生贄とし、主の民との平和を確立しようとしますが、イスラエルの民は受け入れず、ローマ帝政に対する武力による反乱に救いを見出そうとします。その結果、決定的敗北を経験することになるのです。預言者、主イエスにより示された非暴力のメッセージは新しきイスラエルであるキリスト者に担われますが、そのキリスト者たちも、罪の縄目に巻き取られ、理屈をつけて戦争を始めます。そして今に到るまで戦争の絶える時はないのです。

　アブラハムやイサクは闘わず平和の契約を締結することができたのはなぜでしょう。神様の恵みの約束を信じ、とられたものはとりかえせず、新たなところで神の恵みを探したのです。彼等は弱き者でした。ペリシテ人に勝つことなどとてもできません。主なる神の約束を信じるのみです。外部からは臆病者と見られたでしょう。そのうち、相手方が、アブラハム、イサクの幸せを見て、主なる神が彼らの内に働かれていることを悟らざるを得なくなったのです。そして平和の契約に到ります。強い力を持っていると、かえってそのようには出来ない、ように思います。主イエスは大祭司、ユダヤ人達、そしてローマの提督の前では全く弱き者でした。剣による反抗は全く致しませんでした。しかし、自らの死により、信仰者の神との平和を齎して下さいました。そしてこの世と信仰者の和解・平和は主の再臨による裁きを経た後現実化します。我々は、その希望の下にあります。その希望への確信が武力を持たない我々の力なのです。一言祈ります。

（今日はイサクの生涯における二つの物語りから学びました。妻を妹と偽った話では繰り返し罪を犯すアブラハムの一族に、これらに罪を超えた「選びの恵み」を示して下さる主なる神を教えて下さいました。また、井戸を探し、放浪する一族の行動を通して、弱き者が主なる神の約束を信じて歩む平和の民の姿を見ました。どうか私たちを「武力で平和はつくれない」という確信の下で歩むことが出来ますように。主イエス・キリストのみ名により祈ります。アーメン）